

双子の妹がキャンプにハマりました

トロホルモン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもなでしこに双子の兄が居たらつと思って書いてみました。

目

次

第1話
第2話
第3話
第4話
第5話
第6話
第7話
第8話
第9話
第10話
第11話

53 49 42 37 33 29 24 18 12 5 1

第1話

車に揺られながら俺は車の窓の外を眺めていた。

今日から家族全員で静岡から山梨にお引っ越しする事となつた。今は姉の各務原桜が運転している車に乗つて山梨に向かっている。助手席には双子の妹の各務原なでしこがすやすや眠つており、その後の席に私こと各務原やまとが座つている。

「見えてきたわよ」

「……富士山だ。浜名湖からよりも綺麗だな」

「そうね」

窓の外には大きな富士山が見えていた。

静岡にいた頃はよく妹のなでしこと幼馴染の綾乃と3人で浜名湖から富士山を見ていたな。山梨からだと富士山はこんなにも大きく見えるんだな……なんだか感動するな。

「そうだ。なでしこ、なでしこ起きろ！」

「へへへっ、もう食べられないよ」むにゃ

助手席で眠つている双子の妹のなでしこを起こそうと背後から搖さぶつた。だが全くの反応がない……ただ熟睡しているようだ。

「起きないわね」

「昨日は富士山が間近で見れるといつて夜ふかししてたからな」

昨日夜は妹のなでしこが俺の部屋までやつて来て目をキラキラ光らせて『富士山、富士山!!』と連呼してたからな、多分夜中まであんなテンションだつたんだろう。綾乃と別れる時はあんなにポロポロ泣いていたのにな。本当に変わった妹だよな。

「やまとは昨日は眠れたの？」

「なでしこを部屋から追い出してからすぐに寝た」

「そう」

「起きたら『なんで起こしてくれなかつたの!!』てブーブー言われそうだな」

「なでしこが早く寝なかつたのが悪いから気にしなくていいわよ」

俺はなでしこを起こすのを諦めて車のドアの方に持たれて外の景色を眺める事にした。本当にデカイな富士山……

??

「どうして起こしてくれなかつたの!!」

新しい新居に着いて俺は車から降りて助手席で熟睡していたなでしこを無理矢理に起こした。そして新しい家に着いた事を話すと驚いた顔をして俺の方を向いて『富士山は?』と尋ねられたから通り過ぎた事を伝えると涙目になつて俺にそう言つてきた。

新しい家からは富士山は見えない。父さんがこつちに引っ越す前になでしこに家から富士山が見えるとか言つてたから、後で俺が気になつて調べてみた結果、山が邪魔して富士山は見えないと言うとなでしこは絶望していた。父さんは申し訳なさそうにしてたが姉さんが『あつちの家に行く前に富士山がよく見れる場所通るからその時に見たらいいじゃない』と言うとなでしこは立ち直り元気になつた。

「起こしたけどお前が熟睡してたんだろ。そんな事より早く車から降りて荷解きするぞ」

「ちゃんと起こしてよお兄ちゃん!」

俺は背後からブーブー文句を言つてきてたが、それを無視して家中に入った。先に父さんと母さんが家に来ているし、引っ越し業者の人があらかたの荷物は運んでくれていてる筈だ。後は荷物を荷解きして整理するくらいだろう。

俺は玄関を開けて中に入つた。中に入ると下駄箱があり真っ直ぐな廊下があり、突き当たりには階段があつた。初めてみたからなんか新鮮な感じがするな、数日でもしたら慣れるだろうな。

「あら、おかえりやまと

「……ただいま」

奥の扉が開いて母の静香が出てきてそう言つてきた。なんだかただいまつて返事をするのに若干違和感を覚えた。まあ、新しい家の初ただいまだからな。新しい家と同様に直ぐになれるだろう。すると背後の扉が開いてなでしこが入ってきた。

「お母さんただいま！」

「なでしこもおかえり。二人の荷物は2階の自分の部屋に置いてあるからそこの扉が洗面所になるからそこで手洗いうがいしてから自分の荷物の荷解きして来なさい」

「はーい」

洗面所で手洗いうがいしてから俺たちはそれぞれの部屋へと移動した。部屋に入ると段ボールがたくさん置いてあり、ベッドは既に組み立てて貰つていてマットレスも敷いてあつた。引っ越し屋さんか父さんがやつてくれたのかな？

そうそう、俺の部屋はなでしこの部屋の隣だつた。なでしこの部屋の前には姉さんの部屋だそうだ。姉の部屋の前を通ると扉が開いていて、真面目そうな顔をして原付の旅のDVDを大事そうに仕舞つていた。本当に好きだよなそのシリーズ、確かに面白いけど……

さてと、俺もさつさと荷解きを早く済ませてからここら辺をぐるつとランニングしに行こうかな。俺は片手にカツターを持って梱包された段ボールを切つて中身を開けて荷解きを始めた。

「そうだ、今から自転車で富士山を見に行こう！」

やまとがせつせと荷解きをしている時に隣の自室に居たなでしこはそう言つて、荷物の中からトランプをポケットに入れて部屋から出て行つた。外に出てガレージに置いてあつたなでしこ愛用の自転車を出して、そのまま富士山目掛けて走り出した。

「よーし、富士山に目指してレッツゴー！」

そしてなでしこの42kmの自転車の旅が始まつた。

??

荷解きを終えた俺はランニングウェアに着替えた。俺の荷物は姉ちゃんやなでしこよりも少なく思つていたよりも早くに荷解きを終えた。

携帯をポケットにしまつてから部屋を出てリビングに向かつた。リビングでは父さんと母さんがまだ荷物をしていて忙しそうに見え

た。

「あら、やまとも荷解き終わつたの？」

「うん。もつて事はなでしこか姉ちゃんも終わつたの？」

「なでしこがね。30分前くらいにガレージから自転車を出してそのまま何処かに行つたのよ」

「たぶんまだ荷解き終わつてないなアイツ」

「それでやまとも今から外にランニングしに行くの？」

「その予定だつたけど、父さんと母さんの荷解きが大変そうだから手伝つてからにするよ」

「あらそう、ならお願ひするわね」

そして俺は父さんと母さんの荷解きを手伝つてから家を出て走り出した。

第2話

ランニングを始めてから数時間くらい経つた。初めての山梨の雰囲気を楽しみながらのランニングは予想以上にのめり込んでしまい時間を忘れて走つてしまつた。そんな時に携帯の入ったポケットが震えているのに気がついて俺は立ち止まつて携帯を取り出すと姉から電話が掛かってきていた。

「もしもし、どうしたの姉ちゃん」

『走つている時になでしこ見かけなかつた?』

「いいや見てないけど。まだなでしこ帰つてきてないの?』

『ええ、本当に何処に行つたのよ』

『携帯には電話したの?』

『携帯を自分の部屋に置いていったのよ』

「なでしこらしいな。俺もそろそろ帰るよ」

『わかつたわ、気をつけて帰るのよ』

そう言つて俺は電話を切つてから地図アプリをつけて現在地を確認した。地図には静岡にアイコンが配置されていた。予想以上に走つてしまつた、まさか引っ越しして初日に静岡に帰つてくるなんてホームシックかよ。……さてと、帰る頃には真っ暗だらうな。

そんな事を思いながら俺は来た道を戻るようになにまた走り出した。

予想通りに家に着いた時にはもう真っ暗になつていた。帰つている途中に母さんから電話掛かつて来ていて、心配そうな声で俺に何処にいるかと聞いて來た。その時には静岡から戻つて來ていて南船駅の近くに居たからそれを話すと安心していた。

「ただいま……あれ、姉ちゃん出かけるの?」

「おかげり。今からなでしこを迎えて行くのよ」

「なでしこから電話あつたんだ。何処に居たの?」

「本栖湖だつて、富士山を見たくて自転車漕いで行つたら着いて寝て

しまつて、起きた時に暗くて帰れなくなつたそうよ。それで本栖湖に居たキャンプしている人に携帯を借りて電話して来たの」

「そなんだ」

「アイツ本栖湖まで行つてたんだ。よくそこまで自転車で行けたな、俺も走つて静岡に帰つていたけど。

「今からなでしこを迎えて行くからやまともついて来てよ」

「着替えてからでいいのなら行くよ」

「なら40秒でしたくしてきて」

「姉ちゃんは何処の空賊だよ」

「そう言つて俺は慌てて自分の部屋に行き着替えてから姉ちゃんの車に乗つた。そしてそのまま車を飛ばして本栖湖に向かつた。

「そう言えればやまとは何処まで走つての？」

「展望の丘くらい」

「……はあゝ変な所は似てるわね。やまとの場合はその度合いは馬鹿げてるけど

「それ絶対に褒めてないだろ」

「姉ちゃんは呆れていた。まあ、帰り道に展望の丘を通つたからそれ以上走つてるんだけどね。」

??

無事に本栖湖に着くと駐車場には2つの人影があつた。一つは迷子の妹のなでしこ、隣には見慣れないお団子ヘアの女の子が居た。たぶん、さつき姉ちゃんが言つてたなでしこに携帯を借してくれたキャンプをしている人なんだろう。律儀について来てくれたんだ。見た目からして中学生っぽいけど、一人で居るつて事はソロでキャンプに来てるつて事だよな。もしかすると年上なのかも。

「やまと、袋を持つて」

「……何故キウイが沢山入つてるの？」

「なでしこを助けてくれたお礼に渡そうと思つて」

「なるほど。姉ちゃんが渡さないの？」

「私はなでしこの方をやるから。やまとが渡して来て」

人にお礼の品を渡すとかやつた事ないんだけど、取り敢えずやれただけやつてみよう。俺はキウイが沢山入った袋を持った。そして車を駐車場に停めて俺と姉ちゃんは車から降りるとなでしこは嬉しそうな顔をしてコチラに走つて来た。

「お姉ちゃん、お兄ちゃん！」

姉ちゃんの方を見ると何処かホツとした表情をしていた。そしてなでしこが俺たちの側まで来て姉ちゃんに抱きつこうとした瞬間に姉ちゃんの拳がなでしこの頭に炸裂。それも3発。それを見ていた俺は若干引きながら『姉ちゃんを怒らせないようにしよう』と心に誓つた。そして姉ちゃんの雷がなでしこに落ちた。

さてと、あの姉妹はそのままにして置いて姉ちゃんから待たされたキウイを持ってお団子ヘアーの女の子に近づいた。女の子は二人の方を見ながら引いていた。

「あの、この度は妹が本当にお世話になりました。心ばかりでございますが受け取つてください」

「えついや……私は大した事はしていませんし」

「いいえ、貴方と出会わなかつたら妹がこの寒い中で野宿して凍死したかも知れません。貴方は妹の命の恩人なのです」

「そ、そんな大袈裟な」

「どうか受け取つてください」

「で、では」

そう言つて女の子はキウイの入つた袋を受け取つてくれた。ちよつと強引だつたけどなんとか受け取つてくれたな、これで姉ちゃんに怒られなくて済むな。……それよりも姉ちゃんは最初にお礼を言わないと。

そんな事を考えると姉ちゃんがこっちに來た。

「すみません、お見苦しい所をお見せしてしまい。妹が本当にお世話をになりました」

「大丈夫ですよ、携帯を貸したくらいなので」

「おおおおお……」

姉の拳骨を3連続でくらつたなでしこは涙を流しながら頭を抑え

ていた。頭には綺麗なタンコブが三つもできていた。

「アンタ持ち歩かなきゃ携帯電話とは言わないのよ。ほら、さつさと乗れこの豚野郎!!」

「ぐへえ、いてて、いてて。お姉ちゃん、やめれーカレー麺でる！」

「……」

姉ちゃんはなでしこ持ち上げて最初から開いていた助手席になでしこを放り込んでその足で踏みつけてながら押し込んだ。取り敢えずこのお団子ヘアーの女の子と会話ををしておこう。

「ふ、普段は優しい姉なんです。今回は心配していた反動からあんな暴力的になつたんだと思います」

「そ、そなんですか」

「そう言えば一人でキャンプに来てるのですか？」

「えつ、はい」

「凄いですね一人でキャンプをするなんて。テントを建てたりご飯作りをしたり色々と大変ではないのですか？」

「そんな事ないですよ。毎回一人でキャンプをしていますので……それにテントを建てるのは慣れると簡単ですし、ご飯の方は毎回カップ麺なので」

「それでも凄いですよ。テントを建てるのに慣れるまで来ているなんて。それにカップ麺のお湯を沸かすにしても家ではガスや電気に頼りつきりだけど、キャンプでは木を拾つたりして火をつけたりと色々と大変じゃないですか。それを毎回してるなんて凄いですよ」

「そ、そな……」

お団子ヘアーの女の子は少し嬉しそうな顔をした。昔読んだ人のコミュニケーションの本で女の子には取り敢えず褒めようつて項目があつたから、それを活かして言葉を探して褒めてみたが何とかなつたな。まあでもさつきの言葉は本音だけど。こんな小柄な女の子でも一人でテントを建てたり、火を熾したり、一晩過ごしたりするなんて凄いと思うよ。

「やまとー、そろそろ行くわよ」

「わかつた。それではおやすみなさい」

「おやすみなさい」

俺は女の子にそう言つてから姉ちゃんの車に乗つた。あれ、なんか車が煙臭いな。

「おやすみなさいーい、カゼひかないでねー」

姉ちゃんも女の子に別れを言つてから車を走らせようとした。

「お姉ちゃん車停めて！」

「えっ!？」

するとなでしこは突然姉ちゃんに車を止めるように言つた。姉ちゃんは驚きながらも車を停めた。

「どうしたんだなでしこ?」

「お兄ちゃん携帯電話持つてる!?」

「ランニングウエアに入れっぱなしで持つてきてないよ」

「もうお兄ちゃん、持ち歩かなきや携帯電話とは言わないんだよ！」

「それはお前にだけは絶対に言われたくない」

「お姉ちゃん持つてる!?」

「はい、どうするつもり?」

そう言つて姉ちゃんはポケットから携帯を取り出した。なでしこはそれを受け取ると慌ててダッショボードを開けてそこに入つていたメモ帳とペンを出して慌てて書き出した。覗いてみるとなでしこは自分の名前と電話番号を書いていた。

「ちよつと届けてくるーー！」

そう言つてなでしこは車から降りて走り出した。どうやらあの子に電話番号とかを渡すようだ。相変わらず凄いよななでしこは、直ぐに誰かと仲良くなれるなんて……一種の才能だな。

そしてなでしこが戻ってきて姉ちゃんはまた車を走らせた。なでしこは車の中で姉ちゃんに家にキヤンプ道具があるかどうか聞いていた。確かデカイテントがあつたような覚えがあると姉ちゃんは言つていた。どうならなでしこはあの子とキヤンプをする約束をしたらしい。まあ、なでしこが強引に約束してそうだけど。そんな事を思いながら俺は夜の山梨の景色を見ていた。

??

無事に家に着くと父さんと母さんがなでしこに軽くお説教をした。
そして姉ちゃんがなでしこに『あんた煙臭い』と言つて風呂場になで
しこを放り込んだので、俺はなでしこの後に風呂に入った。風呂の後
はご飯を食べて自分の部屋に戻った。

俺は自分の部屋の本棚に置いてある本を適当に一冊取り出してか
らキャンプ椅子に座つて本を読み出した。このキャンプ椅子は中学
の時にビンゴ大会で貰つたのだが、結構高いやつらしい。この座り心
地がなんとも言えなくて、本を読む時は毎回この椅子に座つている。

「お兄ちゃん入るねー」

「うーん」

するとなでしこが枕を抱きながら俺の部屋に入ってきた。なんだ
か嫌な予感しかしない。

「おい、まさかと思うが俺の部屋で寝たいとか言わないよな?」

「当たり。これが双子のシンパシーなのかな」

「その格好と枕を見たら誰でも分かる。自分の部屋で寝ろよ!」

「だつて、私の部屋段ボール塗れで寝る所がないもん!」

「どつかのバカが荷解きせずに富士山を見に行つて遭難したからだ
ろ」

「お願ひお兄ちゃん、一日だけ!」

「姉ちゃんの所に行けよ」

「これ以上お姉ちゃんに迷惑をかけたら私……またあんな地獄を見る
事になる」

「浜名湖を自転車でぐるぐるさせられたアレか。今回は富士山までの
道をぐるぐるさせられそうだな」

「だからお願ひします!」

「はあ、一日だけだからな」

「ありがとうお兄ちゃん!!」

こうして俺は数年ぶりに妹と同じベッドで寝る事になつた。

俺は忘れていた。なでしこと一緒に寝るのは嫌いだつて事を。

理由はコイツ寝相が悪いからだ。

「くしゅん……コイツ俺の布団を全部持つて行きやがった」
「すやすや」
隣を向くとなでしこが幸せそうな顔をして布団にまるまりながら
眠っていた。

第3話

なでしこ行方不明事件からの翌日。

朝ご飯を食べ終えた俺は母から明日から学校だから新しい制服を一度着ておきなさいと言わされて、一度自分の部屋に戻つてから制服に着替えてみた。

「こつちの学校の制服もブレザーか」

俺は制服を着ながらボソッと呟いた。この間まで通つていた浜松の学校でもこれと同じブレザーの制服だつた。そう言えば最近は学ランをあまり見ないよな。

制服は少し大きめだつたけどそこまで気にする必要はない。他におかしな所は無さそだつたから大丈夫そうだな。教科書と学校指定の鞄は昨日届いていたみたいで、さつき母さんに渡された。取り敢えず時間割通りの教科書や筆記用具などを鞄に入れて明日の学校の準備も出来た。さてと、着替え直した後はランニングにでも行こうかな。

「お兄ちゃん助けてー！」

「嫌だ」

「話を聞いてから断つてよー！」

突然ノックもせずに妹のなでしこが俺の部屋に勢いよく入つてきた。

「それで、何のよう？」

「荷解きが全然終わんないから手伝つてー！」

「昨日も助けただろ。姉ちゃんと頼めよ」

「お姉ちゃんにお願いしたら怖い顔をして断られて」

「それで俺の部屋に来たのかよ。自分一人でやろうとは思わないのか？」

「やつたけど全然進まない、助けて！」

なでしこは必死にお願いしてきた。俺はふと考えた。もしも俺がここでなでしこの荷物の荷解きを手伝わずそのまま終わらなかつた

ら、またなでしこは俺の部屋に泊まろうとして来るだろう。そしてまた布団を取られてしまう……。今回は風邪をひくことはなかつたが2日連続となると風邪ひきそう。

「わかつた手伝つてやる」

「ありがとうお兄ちゃん」

折れた俺はなでしこと一緒にこの部屋に向かつた。なでしこの部屋にはまだたくさん段ボールが積まれていて、いくつかは開いているがまだ中身は入つていそう。

「取り敢えず使う荷物はそのまで、使わない荷物を押し入れにしま

う」

「うん、わかつた」

なでしこに聞きながら荷物をいくつか押し入れにしまい始めた。

「……いや、使わない荷物多すぎ。引っ越す前に減らせつて姉ちゃん言つてただろ！」

「だつてどれも大切な思い出の品だから捨てられないよ。お兄ちゃんはどうなの？」

「捨てるカリサイクルショップに売るかとかした」

「お兄ちゃんつてドライだよね」

「俺の思い出は形よりも記憶の方を大事にしてるんだよ」

そう言いながら俺はなでしこの手伝いを続けた。荷解きは昼前まで続いた。途中なでしこが漫画を読み出してサボつたりアルバムを見つけては手を止めたりしたが、その度になでしこにアイアンクローケをした。

??

なでしこの荷解きをしていたらお昼ご飯の時間になつていた。荷解きはまだ終わつてないが後はなでしこだけでも出来る量だつたので、俺は昼からは一人でやれと言つた。なでしこもそれに了承して一緒にリビングに下りてお昼を食べた。お昼を軽めに食べた後、俺はランニングウエアに着替えてからストレッチをして家を出た。姉ちゃんに県外へ出るのを禁止されたから、今日は下の方ではなく学校や富

土山とかがある上の方に向かつた。昨日と同じように南船駅の方に行つてから、そのまま富士川沿いを上流へ向けて走り出した。

途中でなでしこが好きそうな焼きそば屋があつて写真を撮つて送つたら凄い反応してた。今から食べに行くとか言つてたがまだ荷解きが少し残つてるし、姉ちゃんから今日の外出禁止令が出てたから今日は行く事は出来ないだろう。それにしても、さつき昼飯を食べたばつかなのに食べようとするとはな。流石なでしこって所だな。

そして富士川の上流へ走つていると前の方から茶色い毛玉みたいのがこちらに向けて走つて来ていた。……よく見ると犬だ、犬種はたぶんチワワだな。緑色のダウンジャケットを着ていて可愛らしい。良いとこの飼い犬なのかな？近所に居たゴールデンレトリーバーは服なんか着ずに庭で元気に駆け回つていたな。

つてか、背中からリードみたいなのが見える。コイツ逃げて来たのか？……取り敢えず捕まえるか。俺は走るのをやめてしゃがんでから真っ直ぐに走つて来てるチワワを捕まえる構えを取り

「わふうー!!」

チワワは更にスピードを上げて俺の腹に激突した。俺は変な声をあげながらとチワワを身体全体で受け止めて捕まえた。

こ、コイツなかなかやるな。このチワワの異名はこれから『激突王』にしよう。

「すみませーん。私の犬でーす！」

すると飼い主らしい人がこちらに走つて來た。女性なのに短めの黒髪でニット帽を被り、ダウンジャケットやマフラーに手袋と防寒対策はバツチリつといつた服装をした人だつた。うちの家族の女性陣は全員髪の毛長めだし、綾乃もロングヘアだ。そうそう、昨日のキャンプをしてた人も大きめのお団子ヘアだつたけど、お団子をほどいたロングヘアになりそう。……俺の周りにショートヘアの人居ないな。

飼い主さんがリードを握るのを確認すると俺はチワワを放した。チワワは体温調節をしながら飼い主さんの足元に行つた。

「ちくわを捕まえていただきありがとうございます」

「いいえ気にしないでください。……えつ、ちくわ!?」

「はい。この子の名前はちくわっていいます」

「わふう」

このチワワの名前はちくわって言うのか。なかなか個性的な名前だな……その名前をつける方もつける方だな。この飼い主さんもなかなか個性的そうだな。

「あの、その格好で寒くないんですか？」

「よくこの格好で走っているからまだ大丈夫ですね。だけど、山梨の方が寒いですね」

山梨は思っていたよりも寒い。浜名湖で走っていた時は風は強くて寒かつたな。静岡は山梨よりも気温が寒いらしくな。

「もしかしてつい最近に山梨に引っ越して來たんですか？」

「はい、昨日引っ越して來ました。あと、明日から本栖高校に転校する予定なんです」

「えっ、私も本栖高校に通っているの」

「そうなんですか。学年は一年生です」

「私と同じだね。もしかすると同じクラスになるかも」

ちくわの飼い主さんは見た目から学生みたいだつたけど、同じ年だつたんだ。

「そう言えば自己紹介がまだだつたね、私の名前は齊藤恵那。同じ年みたいだから敬語じやなくていいよ」

「わかった。俺の名前は各務原やまと、そつちも敬語じやなくていいよ。転校したらよろしく齊藤」

「うん、よろしくね各務原くん」

齊藤と自己紹介をしてから少しちくわの散歩に付き合つた。途中でちくわは歩くのをやめて齊藤に向かって軽く鳴くと、齊藤はちくわを抱っこして散歩しだした。ちくわは寒いのが苦手らしく、冬の散歩は途中で抱っこするらしい。とある歌に犬は雪の中で庭を駆け回るとか言つてたから寒さが苦手ではないと思つてたけど、犬にも寒さが苦手な奴も居るんだな。近所に居たゴールデンレトリーバーは寒さ

なんてへつちやらみたいな顔をしてたけどな。齊藤に抱っこされて
いるちくわはぬくぬくとしていて、顔が緩んで幸せそうな表情をして
いた。

「私の家はあっちだからもう行くね」

「ああ。また明日学校で会えたらよろしく」

「こちらこそよろしくね」

そして齊藤と別れた。俺は軽く屈伸をしてアキレス腱を伸ばして
からまたランニングを再開した。

??

ランニングを終えた俺はお風呂に入つてからリビングに行つた。
リビングではなでしこがソファーの上で寝転がりながら携帯をい
じつていた。

「もう荷解きは終わつたのか？」

「うん、ばつちり」

「ばつちりじゃねーよ。ばつちりなんだつたら俺に頼らずに一人で出
来る物だよ」

「ごめんなさい」

そう言つてからなでしこはまた携帯と睨めっこを始めた。初めて
の携帯だからつてもう依存してゐるのか？

「なにそんなに携帯と睨めっこしてるんだ？」

「昨日のキャンプしていた人から電話が来ないの」

どうやらなでしこは昨日連絡先教えたお団子ヘアーのキャンプ少
女からの連絡を待つていたらしい。昨日今日とで連絡して来るとは
限らないだろう。あっちもキャンプしてたから。それに今日は家に
帰るからそれで忙しいのかも知れない。

「あっちも何かと忙しいんだろ。気長に待つてたらいつか連絡くる
よ」

「そうかな。アヤちゃんがつたら直ぐに返事してくれるけど」

「綾乃は友達だからだろ。あつちは赤の他人だ、連絡するにも色々と
躊躇うんだろ」

そう言つてから俺は冷蔵庫に向かつてお茶を取り出して飲んだ。
なでしこはいまだに携帯と睨めっこしながら「むむむ」と何か唸つていた。これ以上何を言つても無駄だと思つた俺はお茶を冷蔵庫にしまつてから自分の部屋に戻つた。

第4話

なでしこの荷解きを手伝つた翌日。

「お兄ちゃんはやくはやく!!」

「そんなに急がなくても遅刻しないから。それとちゃんと前を向け、また転ぶぞ」

俺となでしこは本栖高校へ向けて歩いていた。家から駅までは少し距離が離れているから自転車で行き、駅からは電車で向かう事になっていた。家から駅までだろうが、家から学校までだろうが普通に走りで行けるけど、弁当がぐちやぐちやになるからやめた。お昼をパンにして走つて登校したら陸上部の顧問に目をつけられたからやめた。この高校でも目をつけられるのが嫌で目立つ行動は取りたくないでの、普通の学生らしく登校する事にした。

それとなでしこが電車を降りて駅を出て数歩目で転びそうになつたが、俺が慌ててなでしこを受け止めたので転ぶ事はなかつた。

「大丈夫大丈夫！」

そう言つてなでしこは一人で走つて行つてしまつた。周りにいた同じ本栖高校の制服を着た生徒から視線を集めていた。取り敢えず視線は無視して一人歩き出した。浜松にいた時でもこんな事よくあつたからな、気にせず無視しておけばどうにでもなる。俺は一人なでしこを追うように学校に向かつた。

「ねえ、あの人力ツコよくなかった？」

「あんなカツコいい人うちの高校に居たかな？」

「居ない居ないよ。居たら入学当時から有名になつてるよ」

「さつき居た女の子つて彼女かな？」

「でもお兄ちゃんとか言つてたから兄妹じやない？」

「兄妹にしてはあまり似てなかつたね」

なでしことやまとが居なくなつた後に女子生徒達がヒソヒソ話をしていた。やまとは知られていないが結構モテている。静岡に居た

時でもモテていたが、やまとからのミステリアスな雰囲気とオーラで話しかけてくる事はなかった。

それと、なでしこやまとは二卵性なのであまり似ていない。

??

無事に学校に着いた俺は、上履きに履き替えてからまず職員室に向かつた。職員室の場所は事前にお便りで知らされていた。先になでしこが行つているから話を済ませてあるだろうな。そんな事を考えている内に職員室に無事に着いた。

「失礼します」

「あっ、お兄ちゃんこつちこつち!!」

先に職員室に来ていてこつちに手を振つているなでしこの側には、女性の先生が居た。俺はなでしこの方に近寄つた。

「あなたが各務原やまとくんね。今日から私があなたの担任になります」

「はい、よろしくお願ひします」

どうやらこの人が担任の先生なのか。

「あの先生、この学校の部活にキャンプする部活はありますか!?」

「えーっと……登山部がありますね」

「と、登山部ですか？」

「はい。うちの登山部はよく山登りをしてきまして、毎月何処かの山に登っています。他にも登山の為に体力作りをしたり、もしも遭難した時の為にサバイバルの勉強や体験をしたりしてます。それとキャンプもするのでテントを建てる練習などをしていますよ」

「本格的な登山部なんですね。よかつたななでしこ、お前体力もあるしキャンプもしたがつていたから登山部に入部したら?」

「…………私はもつと緩いキャンプが良いです」

まあなでしこには本格的なキャンプよりも、緩いキャンプの方があつていいだろうな。サバイバルとか一番向いていない。サバイバル関係なくお腹いっぱいご飯を食べてしまうタイプだからな、なでしこはテントを建てて焚き火をしてキャンプご飯をのんびり作つて食

べたりとわいわいした方が向いていそうだな。

「それなら野外活動サークルですね。キャンプをしたいと言つてサークルを作られたらしいですよ」

「野外活動サークル!!? 私そこにします!」

なでしこは野外活動サークルに入部する事を即決したらしい。まあ、本人がそれで良いのならいいけど。俺は部活に入るつもりはなく、バイトをする予定だ。昨日走つて居た時にアルバイト募集の紙を貼つていたコンビニがあつたから今度応募する予定だ。

そんな事を考えているとチャイムが鳴つた。

「それでは各務原さんはあちらの女性の武田先生の所に行つてください。各務原くんは私の担任しているクラスなので着いて来てください」

「分かりました」

「それじゃあお兄ちゃん、またね」

「先生に迷惑かけるなよ」

「かけないよー」

俺はなでしこと別れて先生の後について行き職員室を出た。

少し歩いてから教室に着いた。先生がドアを開けて入つていき、俺はその後に着いて行き教室に入った。教室の中に居た生徒全員が俺に注目してる……あれ、あそこにいる青みがかかった黒髪の女子は何処か見覚えがあるな。あつちも何故か凄く驚いた顔をしてる。口がポカンと開いて固まっている。

「今日からこのクラスの一員になる各務原くんです。それじゃあ各務原くん、自己紹介をしてね」

「わかりました。静岡の浜松から転校してきました各務原やまとです。趣味はランニングで、よく浜名湖で走つていました。残り少ない二学期と三学期の間よろしくお願ひします」

俺は簡単に自己紹介をした。クラスは一瞬しんつと静まつてから拍手が起きた。なんだつたんだ今の間は?

「それじゃあ各務原くんの席はそこに空いてる席が君の席だからそ

ここに座つて

「わかりました」

俺はそう言つてから空いている席に向けて歩き出した。自己紹介が終わつて自分の席に向かつて歩いているだけなのにさつきから視線が俺に集まつてるよ。もういいだろ、前を向けよ前を。空いている席の隣を見ると、見覚えのある女子が座つていた。まさかお隣さんになるとはな。

「よろしく」

「えっ、よろしく」

突然俺が声をかけた事によつてその子は驚きながらも返事を返してくれた。その子の声を聞いて思い出した、この子本栖湖でなでしこを助けてくれたお団子ヘアーの子だ。今日はお団子ヘアーを解いていて分からなかつたな。

そして朝のホームルームがはじまつた。

??

1限目の授業が終わつて休み時間。転校してからの初めての休み時間だ。転校して最初の休み時間に起きるのは質問責めのだが……

「・・・」

誰も来ない。周りからの視線は物凄く感じるのに誰からも話しかけられない。俺は珍獸か猛獸か何かなのか?気分はもう動物園の檻の中に入る動物のそれだ。

よし、ここは俺から話しかけよう。隣は本栖湖で出会つたキヤンパーさんだ。一度話した事があるから他の人よりも話しかけやすいだろう。

「あの、一昨日ぶりですね」

「うおっ!!?」

するとキヤンパーさんは弄つていたスマホを落としそうになつていた。そして落とす事なく見事にキヤッチした。なんだか悪い事をしたな。取り敢えず謝つておこう。

「すみません、突然話しかけてしまって」

「いいえ。友達とメールして居て夢中になっていたので。一昨日ぶりですね、まさか同じ年だったなんて」

「そうですね、私も同じ年とは思いませんでした。あと、同じ年なので敬語じやなくていいですよ。さつき自己紹介もしましたが各務原やまとです」

「わかつた。私の名前は志摩リン。よろしく各務原」

「よろしく志摩」

俺は志摩と簡単な自己紹介をした。周りからの視線は更に集まつたような気がする。

「さつき同じ歳つて思わなかつたつて事は私を年下だと思つたの？」
「見た目からすると年下だと思つてたけど、一人でキヤンプをするくらいだから年上なのかなつて思つた」

俺は正直に話すと志摩は驚いた顔をして居た。

「そんな事初めて言られた」

「そなんなんだ。志摩こそ俺の事どう思つてたんだ？」

「絶対に年上だと思つた。なんか年上つて感じのオーラみたいなものが見えたから」

「そんなスピリチュアルなもん出てないよ」

「いや出てる。だからみんな各務原の所に来ないんだよ」

「マジかよ」

志摩からの言葉にショックを受けた。そんなスピリチュアルなものの俺から出ているとは思わなかつた。だから前の学校の時でも話しがけてくる奴は居なかつたのか。

「そう言えば妹が志摩からの連絡を待つてたぞ」

「またキャンプしようつてやつか。暖かくなつてから連絡しようと思つてた」

「たぶんなでしこの方から志摩に会いに来ると思うぞ。同じ学校に居るんだから」

「えつ、同じ学校？各務原の妹なんだよな？」

「ああ。『双子』の妹だ」

「ええ!!? 双子なのに全然似てない!!」

「二卵性だからな」

「まだ運転してたお姉さんの方が各務原に似てる」

「俺は姉ちゃんによく似てるって言われるからな。 そう言えば志摩は部活に入ってるのか?」

「いや、入つてないけど」

「そうなんな。 てっきり野外活動サークルとかに入つてると思ってた。 なでしこもその野外活動サークルに入るつて張り切つていたから」

「あそこはノリが苦手だから。 もうアイツ部活を決めたのか、早いな。 各務原は何処か部活には入るの?」

「いいや、入る気はない。 アルバイトをする予定」

「なら私と同じだ。 私はもうアルバイトをしてるけど」

「何処で働いてるんだ?」

「本屋」

「本が好きなんだ」

「ソロキヤンでよく本を読んで過ごしてるから」

いつの間にか志摩と打ち解けていて、そんな話をしていたらチャイムが鳴り次の授業になつた。

第5話

なでしこと転校して来た日の放課後

無事に転校初日を終えた。授業の方は浜松に居た時の高校の方が先をやつていたから余裕でついていけた。休み時間は隣の席の志摩とだけ話していた。時々トイレに行つて帰つてくると志摩の方に沢山の生徒が集まっていた。志摩つて結構人気者なんだな、見た目はちつちやくて可愛らしいし、シマリンつて苗字と名前を続けて読むと何処かのゆるキャラみたいな名前にも思える。志摩つてモテるんだろうな。俺が帰つて来たと分かると直ぐに志摩に集まっていた人が全員散つた。一人残つた志摩の方みると疲れた顔をしていた。俺は『人気者は大変だな』と声をかけると志摩は嫌そうな顔をして『全部お前の所為だ』と言い返された。俺はその言葉に理解が出来ずに軽く謝つておいた。

そして放課後になり俺は荷物を鞄に纏めていた。志摩はせつせと荷物をまとめていた。そんなに慌ててどうしたのやら？

「それじゃあ私は委員会があるから」「委員会だつたのか。ああ、また明日」

志摩に別れを告げると同時に放送が流れた。

『一年の各務原やまとくん、各務原やまとくん。ホームルームが終わり次第職員室まで』

何故か放送で俺が呼ばれてしまつた。何故初日から放送で呼ばれないといけないんだよ。なでしこと一緒に呼ばれるのなら転校して来たばかりだから説明とか色々とあると思う。なのに何故俺一人名指しされるんだよ。俺、何もしてないけど！?

「何か悪い事でもしたのか」

「聞くのなら疑問文にしてくれ、もう志摩の中でやつたつて確定してるじゃないかよ。今日はトイレ行く以外は教室に居ただろ」

「各務原の事だから知らないうちにやらかしているかもな」「だから何もしてない。おい『ざまあみろ』みたいな顔をするな」

「今日のお前が居なかつた時に私に苦労をかけた仕返しだと思え」

そう言つて志摩は荷物を持つて教室を出て行つた。俺が居ない時に志摩に苦労をかけさせてしまつたのか？全く覚えがないんだけど。そんな事を思いながら俺は荷物を持つて職員室に向かつた。

??

「し、失礼しました」

俺はそう言つてから職員室を出た。職員室に呼ばれた理由は部活の事だつた。陸上部の顧問の先生に呼ばれて部活に入つてくれと言われた。陸上部の顧問の先生は浜名湖マラソンに参加していて俺の事を知つていたようで、どうにかして陸上部に入れようとして來た。俺は断つたがせがんで来て全然諦めてくれなかつた。やつと職員室から出られたところだ。

さてと、これからやる事がなくなつたな……。そうだ、こここの図書室でも行こう。貯めていた本も全部読んでしまつたから新しい本を読みたいと思つてた。図書室に行つて本を借りに行こう。

「何処だらう図書室つて」

数分ほど歩いていたら図書室を見つけた。図書室に着くまで廊下で凄く注目を集めてしまつたな。転校生だから目立つのか？

俺は扉に手をかけて図書室の扉を開けた。すると中には志摩と……昨日出会つた齊藤が居た。齊藤は志摩の背後に立つて志摩の髪の毛を弄つてゐる。

「志摩と齊藤？」

「あれ、各務原くんだ。本当に転校してたんだね」

「えつ、齊藤と各務原つて知り合いだつたのか？」

「うん。昨日ちくわの散歩をしてた時にね。リンも知り合いだつたんだ」

「今日メールで話した奴だよ。各務原の所為で私は大変だつた」「なるほど……これは確かに。なるほど、噂になつてた転校生つて各務原くんだつたんだね」

すると齊藤は俺をジロジロと見てきた。何が確かになんだよ。それと噂つてなんだ?

「噂つてなんだよ。それと転校生なら妹まで居るんだけど」

「あれ、妹つて各務原くんつてリンと同じクラスつて事は一年生なんだよね?」

「ああ、双子なんだ。まあ、似てないけど」

「各務原くんの妹つてどんな子?」

「うーん……一言で言えば犬みたいかな?」

「おい、外にその妹が居るぞ」

「あつ本当だ」

「どの子?」

「あそここのピンク髪の奴」

「本当だ、各務原くんと似てないね」

図書室の外の中庭でなでしこが学校指定のジャージに着替えて何か棒みたいな物を持つていた。なでしこの他にサイドテールの女子と眼鏡をかけた女子の二人がいて、三人で楽しそうにテントを建てる。もう野外活動サークルに入部したのか。

「つと出来た。クマヘアー」

「おお、見事なクマ団子だな。取り敢えず一枚」パシャ

「おいやめろ、それと撮るな」

齊藤は志摩の髪の毛でクマを模したお団子ヘアを作っていた。見事なクマヘアーダな、自然と携帯を取り出して写真を撮ってしまった。

写真を確認すると志摩と齊藤のツーショットを撮っていた。齊藤はきちんとピースを取っていた。齊藤

「名付けてクマリン団子」

「三重県志摩限定商品『クマリン団子』だな」

「おい勝手にお土産にするな」

「クマリンつてご当地のゆるキャラみたいだね」

「確かに。志摩市のゆるキャラか」

「勝手に私をゆるキャラにするな。それと何故志摩限定なんだよ」

「でももう志摩市にゆるキャラが居るみたいだよ」

「本当だ。クマリンはゆるキャラにはなれなかつたな……残念だな」

「残念だね」

「残念がるな」

俺と齊藤がボケて志摩がツッコミをするという漫才みたいな事をしてしまつた。……出会つて2回目なのに仲良くなるなんて初めてだな。

「あつ、各務原くんの連絡先教えてよ」

「わかつた」

俺は携帯を取り出して齊藤と連絡先を交換した。ついでに志摩とも。初めて家族と幼馴染の綾乃以外の奴と連絡先を交換したな。まさか転校して当日で友達が二人も出来るなんて、静岡に居た時には思わなかつたな。

「「ぎやあああああ!!」」

外から悲鳴が聞こえてきた。外を見るとテントの骨組みの棒が折れてなでしこ達が大騒ぎをしていた……。

「テントつてああなつちやつたらどうするの?」

「買い替えになるのかな?」

「まあ、メーカーに送つて修理かな。こんなパイプがあれば一応は応急処置はできるけどね」

志摩は携帯を見せながら説明してくれた。なるほどな。志摩はキャンプ慣れしてるからこんなトラブルが起きてもいいように調べてあつたんだな。

「こういうの?」

「なんであるんだよ」

「それっぽい物がその落とし物箱に置いてあつたよ」

「なんとタイミングの良い事を」

「リン、これを持つてつて助けてあげなよ」

「ええ~」

「うわー、すげえ嫌そうな顔」

齊藤が志摩にそう尋ねると、志摩は凄く嫌そうな顔をしていた。野

外活動サークルに苦手意識があると言っていたから関わりたくないのだろう。

「じゃあ各務原くん、一緒にどこ行こ?」

「ああ、いいよ。じゃあ志摩行つてくるよ」

「ういー」

そう言つてから斎藤と一緒に図書室を出てなでしこ達が居る中庭に向かつた。

第6話

なでしこ達が中庭でテントを建てるのを失敗した数分後。

下駄箱で靴に履き替えてから斎藤と一緒に中庭に向かつた。

「ど、どうしよう！」

「お、落ち着くんだ各務原。まだだ、まだなんとかなる筈だ！」

「これはどないしようもないであります。もうこれは修理に出すしかあらへん」

「そ、そりだよな。買って一度も使わずにもう修理かこの980円テント」

中庭に着くとなでしこと見知らぬ女子が居て、話し声も聞こえてきた。

折れた棒を持つて悩んでいるようだ。取り敢えず、なでしこに声をかけてみよう。

「おーい、なでしこ」

「あっ、お兄ちゃん！」

「お兄ちゃん!?」

なでしこに声をかけるとなでしこは振り向いて俺達の方にやつて来た。野外活動サークルの二人はなでしこが『お兄ちゃん』と呼んだ事で俺の方を向いて驚いていた。

「どうしたのお兄ちゃん。あれ、そっちの人は？」

「はじめまして、各務原くんの友達の斎藤恵那でーす」

「えっ、お兄ちゃんにアヤちゃん以外の友達が!?」

「本当だよ。綾乃以外に友達が出来た」

「ええ!？」

なでしこのリアクションは多少オーバーだと思われそうだが、それくらい各務原家にとつてはビックニュースだ。綾乃にこの事を伝えたら疑われそうだな。

「あの……その……良かつたね各務原くん」

齊藤に同情されてしまつた。野外活動サークルの2人も何故か哀れみの目で俺の見てくる。

「なんだろうか……凄く心が痛い。こんな経験は初めてだな。
「それでお兄ちゃん、何しに来たの？」

「ああ忘れてた。齊藤、例の物を」

「はーい。これ使つて

「これつてパイプ？」

齊藤はそう言つてなでしこに例のパイプを渡した。だが、なでしこはパイプを貰つてもその意味を理解できないみたいで、頭に?マークを浮かべていた。

まあ、これだけ渡しても意味ないか、実践してみるか。

「それでそのテントの棒の応急処置をするんだよ」

「ええ、そんな事できるの!?」

「ああ。あつ、ガムテープも必要だつたな。なでしこ、何処からガムテープを借りて来てくれ」

「了解。ガムテープー！」

そう言つてなでしこは中庭を走つて出て行つた。そして俺と齊藤と野外活動サークルの二人だけが残つた。

これは自己紹介をしておいた方がいいよな?さつきから野外活動サークルの二人がチラチラ見てくるし、内緒話もしてる。陰口とかされてないよな?

「なあ齊藤、これつて自己紹介した方がいいかな?」

「そうだね。あの二人完全に各務原くんの事を警戒してるよ

「だよな」

齊藤の言つた野外活動サークルの二人は俺の事を警戒しているようを見る。

こういう経験は何度がある。一番酷かつたのは小学生と中学生の頃の修学旅行で、同じ部屋になつた奴等からは一度も話しかけてくる事がなかつたし、風呂だつてだいぶ距離を置かれていたくらい警戒されていた。それと、修学旅行の班行動はなでしこと綾乃と班を組んでいたから一人になる事はなかつた。

よし、気を取り直して自己紹介からだ！

「えつと初めまして。なでしこの“双子の兄”の各務原やまとです」

「「えつ、双子!」」

「そこ驚くよねー」

野外活動サークルの二人は俺の双子の兄発言に凄く驚いていて、齊藤もそれに同意していた。

もう慣れたし、数分前にも同じリアクション（齊藤と志摩から）をとられたから。

「はい。似てないと思いますが本当です。その、妹と仲良くしてあげてください」

「そつ、それはご丁寧にどうも」

「何恐縮してるのあき、ウチらも自己紹介しやんと」

「そうだつた。ごほん、私は大垣千明。この野クルの部長だ」

「ウチは犬山あおいね。よろしくね各務原くん」

「よろしく大垣に犬山」

「あつ、私も自己紹介しておくね。私は齊藤恵那、各務原くんとは違うクラスだけど友達だよ。よろしくね」

「ガムテープ持つてきたよー!!」

こうしてなでしこの居ない所でお互いの自己紹介は終わり、なでしこはガムテープを持って戻ってきた。

ガムテープをなでしこから受け取つてから、俺と齊藤は志摩に見せてもらつたサイト通りの応急処置を始めた。折れた二つの部分にパイプを両方から刺してからガムテープでぐるぐる巻きにして完了。

「わあ～直つたー！」

「直つてはない、応急処置をしただけだ。ほら、テントの建てるのを開しないと」

「うん、わかつた！」

なでしこ達はまたテントの建て始めた。

そして数分後に、なんとかテントを建て終えた。建てたテントの中にはなでしこと大垣が中に入つていつた。

「齊藤さんと各務原くんありがとね、助かつたよー」

「どういたしまして」

「でもあんな事よー知つとつたねー。テント持つとるの?」

「いいや、持つてない」

「あそこに居る子に聞いたの」

そう言つて俺と齊藤は中庭から図書室に居る志摩を指差した。なでしこ達はテントから出ていて、俺達の指差す方を向いた。そしてなでしこは『ああ!!』つと驚きの声を出した。

「あつ、しまりんじやん」

「えつ、しまりん!?」

「ゆるキヤラみたいに言うなや」

「名前は志摩リンだよ」

「えつ、なんでお兄ちゃんが知つてるの!?」

「同じクラスで隣の席なんだよ。あと友達」

「そ、うなんだ!!? ならリンちゃん。リンちゃーーーん!!」

なでしこは名前を呼びながら、志摩の方に走つて行つた。そして見事に窓に激突して崩れ落ちた。

見たら分かるだろ、志摩が屋内にいる事くらい。

そんな事を思つていると、何処からか視線を感じてその方を見ると志摩が居た。志摩は嫌そうな顔をしていて、『おい、余計な事をするな』と言つてゐる様に見えた。

「リン、凄く嫌そうな顔をしてる。たぶん余計な事をするなって思つてるよ」

「齊藤もそう思うか。まあ、いつかはなでしこと出会つていただろうしいいだろ」

齊藤とそう会話をしてから、俺と齊藤は志摩に向かつてグーサインを送つた。志摩は呆れた顔をして『おい、グーサイン出すな』て言つてゐるように見えた。

第7話

なでしこ達のテントを直した週の週末。

俺は朝早くから起きて、一人でランニングをしていた。

今は静岡の富士宮にある、牧場まで走つて来た。まだ朝早いみたいだからオープンはしていないようだ。日が昇り始めたばかりだから閉まつてるよな。

「さてと、そろそろ帰るか」

お腹も空いて来たから俺は帰る事にした。

そう言えば、今日は志摩が富士山の麓のキャンプ場でソロキャンプをすると言つていたな。昨日の放課後、志摩はそわそわしながらキャンプ飯の本を読んでいたな。今頃は自転車でキャンプ場に向かおうと起きたくらいかな？

そんな事を思いながら俺は来た道を戻るように走り出した。

家に帰つてきて風呂に入つてから、母と一緒に朝ごはんを作り、父やなでしこを起こしに行つてから、家族一緒に朝ごはんを食べた。これが俺の週末の日課みたいなものだ。

朝ごはんを食べ終えた俺は、部屋に戻つてから図書室で借りた本を読みながらまつたりと週末を過ごしていった。転校して来てからゆつくりと過ごして居なかつたよな。今週末くらいゆつくりと……

「お兄ちゃん、手伝つて!!」

過ごせませんでした。

俺は、なでしこを無視して本を読むのに集中した。だが、なでしこが俺の椅子に手で掴んで揺らしてきた所為で全然本が読めず、諦めることにした。

「お兄ちゃん！」

「週末くらいいいだろ。一人で頑張れ」
「お願い。手伝つて！」

「はあ、何を言つても無駄か。それで、何を手伝うんだよ」

「倉庫からテントを探すのを手伝つて！」

「テント？……ああ、この前に姉ちゃんがあるとか言つてたな」

志摩と初めて会つた日、車でなでしこが姉に聞いていたな。それで今まで探していなかつたのか。なでしこが志摩とキャンプに行く事になつた時に、テントを見つけてなかつたら、志摩のテントにお邪魔する事になり、迷惑が掛かるだろうな。

「わかつた手伝うよ」

「ありがとうお兄ちゃん！」

今更ながら、本当に妹に甘いよな……

??

外に出て倉庫のある家の裏に行つた。

なでしこは倉庫の扉を開けて、適当に物を取つてから俺に渡してきた。俺は中を確認すると、父の釣竿が入つていた。次に渡して来たのは子供の時になでしことよく遊んだボールで、次は俺が幼稚園の時に遊んでいたロボット玩具だ。

「ない、ない、ない、ない!!」

そしてなでしこは次々に荷物を渡して來た、俺はそれを受け取つてテキパキと地面に置いていった。

するとなでしこの『わあー!!』という悲鳴と共に、倉庫に置いてあつた段ボールなどの荷物の山が崩れて雪崩が起きた。その雪崩になでしこは巻き込まれて生き埋めになつた。

「おーい、大丈夫か？」

「大丈夫、大丈夫」

ちゃんと返事が返つて來たから大丈夫そうだな。

俺は崩れた段ボール達を退かして行き、なでしこを救出しようとした。

「あつた、テント!!」

「見つけたか。なら、俺はこの段ボールやガラクタを片付けるよ」

「ありがとうお兄ちゃん」

俺は一人で倉庫の荷物を片付けはじめた。

引っ越して来たばかりなのに、何故ガラクタや荷物がこんなにもたくさんあるんだよ。少しくらい整理しろよ。

背後で、なでしこがせつせとテントを設営していた。見るからに、色々と部品とか何か足りないような気がするんだが……

「うーん、何か違う」

「一応は、雨や日光を遮る事が出来るからテントだな」

なでしこは、無事にテントを建てることが出来たが、中身がなかつた。

俺がそう言うと、なでしこは建てたテントに入つて座つた。すると冷たい風が吹いた。

「うー、さむさむ。これじゃあキャンプ出来ないよ」

「テントは買わないとな。それよりも、風邪ひく前にテントを片付けて、家の中に入るぞ」

「うん、わかつた。…………あれ、斎藤さんからメールだ」

なでしこがポケットから携帯を取り出した。

いつの間に斎藤と仲良くなつて、アドレス交換したのだろうか？

「あれ……今日リンちゃん、キャンプに行つてるんだ！」

「ああ。富士山の麓キャンプ場つて所に行つてるらしい」

「斎藤さんがURL貼つてくれてる。わあ、富士山がこんなに近くで見れるんだ!!」

なでしこは、携帯で斎藤が送つてくれたURLを開いて富士山の麓キャンプ場の写真などを見ていた。

「麓だからな。富士山の真前でキャンプが出来るから、なでしこには嬉しいキャンプ場かもな」

「うん。そうだ、お兄ちゃん!!」

「なんだ、今何かを思いついた顔をして」

「麓キャンプ場に行つて、リンちゃんにお礼をしに行こー！」

「突然だな。志摩にお礼つて、お前を迎えに行つた時に志摩にキウイを沢山渡したぞ」

「そうじやなくて、リンちゃんにカレー麺を貰ったの。だからそれのお礼がしたくて」

「後日、志摩にカレー麺を返せばいいだろ」

「そうじやないの!!リンちゃんにご飯を作つてあげたいの!」

「そうか。なら頑張れよ」

俺は手をはらつてから、家に戻ろうと歩き出した。

すると、右脚が突然重くなつた。下を見るとなでしこが俺の脚にしがみついていた。

「お兄ちゃんも一緒に着いて来てよ!」

「嫌だよ寒いし。それに、テントもないからキャンプ出来ないだろ」「そ、それなら。お姉ちゃんの車に泊まれば」

「姉ちゃんも巻き込むのかよ。まあ、姉ちゃんなら一緒に着いて来てくれそうだな。……そう言えば、今日の夕方からは姉ちゃんが友達と街に遊びに行くとか言つてたから、先に姉ちゃんにお願いしてこい」「本当、お姉ちゃんにお願いして来る!!」

なでしこは、慌てて庭から家の中に入つて行つた。

庭には俺とテントだけが残つてしまつた。アイツ、テントを片付けずに出で行きやがつて。これも俺に片付けろと言うのか。

「そのままにしておく訳にはいかないよな」

そう呟いてから、テントを片付けだした。

なんとか片付け終えるとなでしこが戻つてきて、姉ちゃんから許可を貰つたようだ。勿論、俺も行く事になつていた。

さてと、ソロキャンしてゐる志摩の所に会いに行こう。驚いた顔をするんだろうな。

「お兄ちゃん、晩御飯は何にする?」

「寒いから鍋にしようか。カセットコンロと材料を持っていけば作れるだろ」

「なら、餃子があるから餃子鍋にしよう!」

なでしこはルンルンと材料を集め出した。まだ昼ごはんを食べてないんだけどな。昼ごはんは餃子以外にしよう。

第8話

なでしこと一緒に倉庫でテントを探した日の午後。

鍋の材料と車中泊の為の布団を持つて姉ちゃんの車に乗り、リンがソロでキャンプしている富士山の麓キャンプ場に向かっていた。

「まさか、やまとに友達が出来るなんてね」

「驚きだよね！」

姉ちゃんが車を運転しながらそう咳くと、助手席に座っているなでしこが同意していた。

この話は転校した初日の夜からずっとしている。父と母は驚愕して、今日の晩御飯が赤飯になつた。姉ちゃんは驚いて鳩が豆鉄砲を食つたような顔をして珍しい表情をしていた。綾乃に友達が二人も出来たとメールを送ると、直ぐに綾乃から電話が掛かってきて長々と話をした。

「もうその話はいいだろ」

「ダメだよ。お兄ちゃんにアヤちゃん以外に友達が出来る事は、各務原家にとつては大ニュースなんだから仕方ないよ！」

「そう言う事よ、諦めなさい」

俺は話を止める事を諦めて、窓の外を眺める事にした。

こつちにはランニングで来てなかつたな。富士山に近くに行くから富士山がよく見えるな。窓の外から綺麗な富士山が見えていた。麓キャンプ場まではまだかかりそただけど。

??

車に乗つて数時間、無事に麓キャンプ場に着いた。

「受付そこじゃない？」

「うん、行つてくる」

なでしこは車から降りて駆け足で建物の中に入つて行つて、俺と姉ちゃんは車に乗つて残つた。

「そう言えば、なでしこって財布持つてきたのか？」

「たぶん、持ってきてないわよ。どうして財布が必要なの？」

「それは……」

俺が姉ちゃんに説明しようとしたら、助手席の扉が開いてなでしこが車に戻ってきた。

「お姉ちゃん、お金かかるんだって」

「……なるほど、そう言う事ね」

「そう言う事。俺、財布持つてきたから払つてくるよ」

「ありがとうお兄ちゃん」

「後で返して貰うからな」

「も、もちろんだよ！」

そう言つてから俺は車から降りて一人で受付に向かい、なでしこと姉ちゃんと俺の分のお金を払つた。車中泊なのに意外にお金が掛かつたな。

車に戻つてお金を3人分払つた事を伝えてから、後ろの席に置いてあつた鍋の品と土鍋とガスコンロをなでしこと分けて持ち、志摩を探しはじめた。

「なんだこのトラとライオンの像は？」

「お口が全開だね」

入口を歩いて直ぐの所に2匹の動物の像が置いてあつた。何の意味をもつてこの像を置いてあるんだ。魔除けとか？

「お兄ちゃん、早く行こ！」

「分かった」

いつの間にか、なでしこは先に進んでいた。俺はなでしこを追いかけるようにまた歩き出した。

志摩を探して數十分。麓キャンプ場にある池や水場やトイレなどを回つたが、志摩は全然見つからなかつた。そんな時に俺はふと思いついた。

「志摩ならテントの近くに居るだろ。椅子に座つて本でも読んでいるだろ」

「あつ、そうか」

そう言つて俺達は芝生のある場所まで向かつた。

芝生に着くとテントがいくつか建てられていて、他にはキャンピングカーなども停まっていた。人は居るには居るけど、俺の思つていたよりもキャンプしている人は少ない。冬キャンプはマイナーな趣味なのかな？

「あの人達も高校生かな？」

「たぶんそうだろ」

少し離れた所で高校生2人が楽しそうに焚き火台を使つてキャンプご飯を作つていた。この匂いは……カレーかな？しかも、本格的なスペイイスを作つたカレーだ。

「これで完成、空さん特性の我羅流カレーだ」

「流石だぞ空！カレーのスペイイスの相性をバツチリと分かつているんだな！」

「流石に小学生の時から何年もカレーを作つていたら相性とか分かるからな。そんな事よりカレーだカレー。飯盒炊爨に行つている優里ちゃん達を呼んできてくれ」

「分かつた！」

すると褐色肌の男子が立ち上がり水場のある方に走つて行つた。

ああ、カレーの匂いを嗅いでいたら腹が減つてきたな。

「お腹空いたねお兄ちゃん、早くリンちゃんの所に行こ！」

「そうだな」

そう言つてまた俺達は志摩を探しに歩き出した。

早く志摩の所に行つて鍋を作りにいこう。

??

芝生を少し歩くと志摩っぽい奴を見つけた。俺達が居る距離から少し離れているから志摩かどうか分からぬ。

「あれって志摩か？」

「ああ～リンちゃんだあ！」

「なでしこが言うからには、あれは志摩なんだな」

「お～い、リンちゃん!!」

そう言つてなでしこは志摩の居るテントに向かつて走り出した。
なでしこは志摩を呼びながら駆け寄つて居るが、志摩は気がついて
いない様子。寝ているのかアイツ？

「だから、分かつたつてー！」

「やつぱりリンちゃんだ！」

「うお!?」

「志摩だつたな」

「なつ、えつ、なんでこんな所に2人が!?」

「齊藤さんから教えてもらつたんだ」

「またアイツか」

志摩はそう言つてため息一つ吐いた。

それにしてもちやんとしたテントを持つてるな志摩は、確かに、祖父
からお古を貰つたとか言つてたな。野外活動サークルが持つていた
テントよりもしつかりとしてるし、お古にしてはまだ新しく見える。
テントだからあまり使わないから新しく見えるだけなのかな？

「もしかして、もう晩御飯食べちゃつた？」

「えつと、まだだけど」

「なら丁度よかつた。それじやあ志摩」

「今からお鍋やろ！」

「えつ、鍋？」

「うん、餃子鍋！」

「材料は全部こつち持ちだから気にするな。なでしこ、シート引いて
くれ」

「わかつたー」

なでしこにシートを引かせてから、俺は荷物を置いた。ガスコンロ
を取り出して土鍋をガスコンロの上に置いてから、スープを土鍋の中
に入れた。

家を出る前に、なでしこと一緒に鍋の準備をして置いた。野菜を

洗つてから切り、それを綺麗なビニール袋に入れた。鍋のスープを作つて冷ましてからペットボトルに入れた。これなら荷物を嵩張る事はなく、樂々と運べた。

「何か手伝おうか？」

「いいよ。志摩はまつたりとしどきな」

「でも」

「大丈夫。材料は家で切つてきたから、土鍋にぶち込んで煮ればいいだけだもん！」

「すげえ不安」

「俺がなでしこを監督しとくから」

「なら任せた」

なでしこは材料を全部入れてから、土鍋に蓋をして閉じて火をつけた。

あとは出来上がるのを待つだけだ。

「どうして今日来たの？」

「志摩にお礼がしたいつと言つて今日来たんだ」

「お礼？」

「カレーメンの！」

なでしこはそう言うと、志摩は驚いた顔をした。

まさか、カレーメンのおかえしの為に今日ここまで来て、鍋を振る舞つてくれるとは思わなかつただろうな。メインはおかえしだらうけど、キャンプを一度して見たかつたのは少しはあるだろうな。

「出来るまでは鍋を覗いてはダメですよ」

「なでしこの恩返し」

「覗いたらお前は鶴にでもなるのか」

俺となでしこと志摩は、鍋が出来るのを待つた。

第9話

なでしこと一緒に鍋を作り出した。

「今日は私達も明日までちゃんとキャンプするよ！」

「えつ各務原もか？」

「ああ。ついでに姉ちゃんも」

「お姉さんも来てるんだ」

「今は友達と富士宮で遊ぶ予定があるからここには居ないけど」

今頃は姉ちゃんは富士宮について友達と遊んでいるだろう。9時くらいになつたらキャンプ場に戻つてくると言つていた。それまでは志摩の所にお邪魔させて貰おう。

「えきし！」

するとなでしこは大きなくしゃみをした。

冬のキャンプ場にして遮蔽物の無い芝生の真ん中にいるから風とかをダイレクトに感じる。どれだけ厚着をしていてもこれは寒いだろくな。

「う～急に寒くなってきたねえ」

「貼るカイロあるけど使う？」

「えつ……せ、1500円？」

「それはもういいよ」

「くつ……2人分をこれで」

「おい、マジで渡してくるな」

俺は悔しそうな顔をして志摩に3千円を志摩の方に差し出しが受け取つてくれなかつた。お金はそのまま財布にしまつた。

「好きなだけ使いなよ、鍋作つてくれるし」

「ホント、ありがとー。貼るカイロつてどこに貼るのが一番効果あるのかな？」

「両目」

「太い血管が通つている所に貼るといいらしい」

「本当、お兄ちゃん貼つて貼つて！」

「貼れる所は自分で貼れ」

そしてなでしこは自分の身体に貼るカイロを貼つた。手の届かなかつた肩甲骨は志摩に貼つて貰つていた。

俺は別に寒くなかったから、カイロは貰わなかつた。

「……5分だけ横になつていい?」

「やめた方がいいと思う」

「寝たら鍋は志摩と2人で食べるから、なでしこの今日の晩御飯は無しだ」

「絶対に起きてる!」

なでしこは固く決意した。

そして、なでしここと志摩は鍋が出来上がるまで少し散歩しに行くと言つて何処かに行つた。俺は1人残つて、鍋を煮込み続けた。

戻つてきたなでしこは少しは残念そうな顔をしていた。理由を聞くと、このキャンプ場で飼つている犬2匹に避けられたらしい。
……どうでもいい事で落ち込むなよ。犬に避けられる事はよくあるだろお前は。

??

いつの間にか日は落ちて夜になつていた。

志摩が持つてきていたランプを点けて貰つて明るくしてもらつた。

「よーし、坦々餃子鍋の完成」

「ま……真つ赤だ」

「そんなに辛くないから心配しなくていいよ」

「多少は辛いと思うけど、寒い時こそ辛い食べ物を食べて暖かくならないとな。もしかして辛い物苦手だつたか?」

「いや、大丈夫」

志摩は辛い食べ物は大丈夫そうだな。

鍋を装つてから志摩となでしこに装つた器を渡した。

「それじゃあいただきますか」

「うん、いただきます」

「い……いただきます。辛そう」

志摩はスプーンで汁を掬つて飲んだ。志摩は驚いた顔をして『うまい』と言った。志摩の口にあつたようで良かつた。なでしこも『美味しい』と言つて鍋を食べていた。

そして志摩となでしこはパクパクと鍋を食べた。途中で暑くて上着やマフラーなどを脱いでいた。

「あのさ……」の間はごめん

そう言つて志摩はなでしこに謝つた。なでしこはきよとんつとした顔をして志摩の方を見ながら食べ続けていた。いや、食べる手を止めろよ。

そんな事を思いながらも俺も食べる手をやめなかつた。

「……この間つてなんだっけ？」

「サークルに誘つてくれたのに、なんというか……すぐ嫌そうな顔をしてたから」

「あの時の事をずっと気にしてたんだ」

「まあ、その……もつとちやんとした断り方とかあつたと思うから」

「そうか。志摩も反省してるしなでしこも許してあげな」

「うーんうん、私の方こそごめんなさい。あの時はなんだかテンション上がつてて、無理に誘つちゃつて。あの後、あおいちやんに言われただよ。リンちゃんはグループでわいわいするキャンプよりも、静かにするキャンプの方が好きなんじやないかって？」

志摩はみんなで騒ぐキャンプよりも、一人でゆつくりと焚き火をしてコーヒーを飲みながら本を読んでいる方があつていいように思える。だけど、ここ1週間はほとんど志摩と過ごしていてわかつた事がある。

「それはまあ……そうだけど」

「別にこうやつて誰かとキャンプするのも嫌いじやないだろ？」

志摩は一人で本とかを読んでいるより、齊藤とかと話している方が嬉しそうな顔をしている。だから、孤独が好きとかではないのだろうな。

「まあ。……偶にならいいかな」

「あつ、リンちゃん照れてる」

「うるさい」

そう言つて志摩は顔を赤くしてそっぽを向いた。

俺の方からはその照れた顔が丸見えなんだけだ。これは珍しい表情をしてる。ジロジロと見るのも志摩に悪いからこれくらいにしておこう。

「じゃあまたやろうね。そこで気が向いたら、みんなでキャンプしようよ」

「……わかつたよ」

「その時はお兄ちゃんも一緒に」

「嫌だよ」

「おい、一人だけ免れようとしてもそれはいかないからな」

「……俺に恨みでもあるのか」

「恨みしかないな。お前の所為で大変な目にばつか遭つてるわけだからな」

「身に覚えがないんだが……つてもう鍋を食い終わつてる」

「ポテチもあるけど食べるー？」

「まだ食うか」

「これ以上食べると、また太るぞ豚野郎」

そう言つて、俺はなでしこからポテトチップなどのスナック菓子を没収した。なでしこはまだ食べ足りなさそうにしていたが、これ以上食べるとまた中学生の頃みたいに戻りそうだからな。食べ終えた鍋や器などを洗う為に水場に行つた。

水場にはさつきの男子高生の二人とさつきまで居なかつた女子校生二人が仲良さそうに後片付けをしていた。

「ちよ、まだ泡が皿についとんね」

「本當だ。空、ちゃんと皿洗わないと！」

「それは俺が洗つたやつじゃないよ優里ちゃん」

「それ俺が洗つたやつだ」

賑やかな人達だな。それと、女子高生の一人に凄いパンクな女子が居る。あの髪型つてどうやつてセットしてるんだ？そんな事よりも

早く片付けないとな。

「さてと、俺達も片付けるか」

「わかった」

「なら私はスプーンとかを洗うね」

各自分かれて洗い物を洗つた。洗い物を洗い終わつた頃にはさつきまでの高校生達は居なかつた。

なんだか不思議な人達だつたなつと心の中で呟いた。

??

洗い物を洗い終えて、志摩のテントに戻つて來た。俺となでしこはビニールシートに座り、志摩はキヤンプチエアーに座つてラジオを聴きながら富士山の話をしたりした。

さつき姉ちゃんからメールが来てこつちに戻つて來たと言つている。そろそろ眠くなつてきたから姉ちゃんの居る駐車場に向かおうかな。

「ねえリンちゃん、日の出つて何時ごろ?」

「6時くらいかな」

「起きられるかな」

「起こさないからな」

「私は寝てるかな」

「大丈夫、目覚ましかけるから。だから、日の出の富士山見よつか」

「やだ寝てる」

お互ひが眠そうに話している。

そろそろ限界のようだからここらでお開きにして寝ようと俺は言うと志摩は身体でこつくりと船を漕ぎながら『わかった』と言つた。俺となでしこは志摩に『おやすみ』と一言を言つてから姉ちゃんが居る駐車場に向かつた。駐車場では姉ちゃんが居て、なでしこが『明日日の出見るから6時前に目覚ましかけて』と少し話していた。俺は大きな欠伸をしてから後ろの席に座り布団を取り出して丸まつて寝ることにした。

目覚ましの音が聞こえて俺は目を覚ました。たぶん、昨日なでしこが言つていた日の出を見る為の目覚ましだろう。

俺は背伸びをしながら欠伸をした。その後に姉ちゃんも起きたのか背伸びをしていた。

「あら、起きたのね。おはようやまと」

「おはよう姉ちゃん。いつもはこれよりも前に起きてるから起きられるよ」

「そうだつたわね」

土日はいつもこれよりも早く起きてランニングしてるから普通に起きられる。さてと、俺はいつものランニングでもしに行こうかな。

「なでしこ起きな。日の出見るんでしょ」

「うう……起きてるよ。ふふつ、起きてるつて」

「まだ寝てるなこれは」

俺がそう呟くと、姉ちゃんはなでしこの鼻を摘んだ引つ張った。なでしこはへんな悲鳴を上げながら目を覚ました。

起きたなでしこと一緒に車から降りた。だが、まだなでしこはウトウトしている。たぶん日の出を見ている時に寝落ちするだろうな。「コンビニで朝食を買ってくるけど何にするの?」

「おにぎりと温かいお茶で」

「焼肉と炒飯とプリンと唐揚げとポテチとバームクーヘンとアイスと豚骨塩ラーメン」

「やまとと同じでいいわね」

「そう言つて姉ちゃんは車を発進させた。

コイツは朝からこんなにも食うのかよ。しかも脂っこい物ばかり頼んでるしよ。

「それじゃあなでしこ、俺はキャンプ場をランニングしてくるから、お前は志摩のテントの所に居ろよ」

「わかつた」

「そう言つてなでしこはのそりのそりつと歩き出した。俺はそれを見てから軽く柔軟をしてから走り出した。

走つて直ぐに富士山から日が出てきた。富士山からの日の出を見たのはこれが初めてだつたから、それは綺麗に見えて一言しか声にならなかつた。

「綺麗だな」

そう呟いてから俺はポケットから携帯を取り出して写真を一枚撮つた。

うん、ちゃんと撮れてるな。そう確認してからポケットにしまつてからまた走り出した。

第10話

なでしこと志摩と鍋キャンプの後の翌日の放課後。

俺は歴史を担当している田原先生に頼まれて、授業で使った教材や資料を資料室まで運ぶのを手伝っている。この田原先生は他の先生と違つて俺を他の生徒と同じように扱つてくれる良い先生だ。他の先生からは何処か距離を置かれている感じがする。特に体育の先生にはヤバい奴みたいな目で見られている。この前の持久走を3分で走り切つたのが悪かつたのか？

「各務原くんありがとうございます。重たい物を運んで貰い」

「いいですよこれくらい。それに、妊婦さんに重たい物を運ばせられませんよ」

「お気遣いありがとうございます。私も後数週間もすれば産休に入りますので、この学校から去ることになります」

「そうなのですか。普通に接してくれる先生が居なくなるのは辛いですね」

「各務原くんは他の先生から距離を置かれてますね。初めて見た時は近寄り難い雰囲気ありましたけど、話してみれば普通の生徒と同じで優しくて気をつかってくれる優しい人でした」

せつからくまともに話せる先生が居なくなるのは寂しいな。前の学校では話しかけてくれる先生は居たには居たけど、陸上部の顧問やサッカー部の顧問などの運動関係の先生だけで、部活の勧誘ばかりでまともに接してくれなかつた。まともに接してくれた先生は小学生の時のおじいちゃん先生と田原先生だけだつた。

そんな事を思いながら俺と先生は一緒に教材を資料室まで運んで行つた。

??

田原先生の手伝いを済ませた俺は図書室に向かつっていた。借りて

いた本を返却しに行くのと、志摩が図書委員で居る筈だから会いに行く事にした。

図書室の前に着いて扉を開けると、中には志摩と斎藤だけがいた。

「おつかれ」

「おつかれ、各務原くん」

「おつかれ、田原先生の手伝いは終わつたんだな」

「ああ。それと、これを返しに来た」

「うい」

そう言つて志摩に本を渡した。志摩は適当に返事をしてそれを受け取つてスキヤンで読み込んでかは返却カゴに置いた。

「それでさつきまで何話してたんだ？」

「来週の土日にまたキャンプに行こうと思つて」

「へえ、何処に行くんだ？」

「長野」

「県境を越えるのか、自転車で行くのか？」

「いいや、原付の免許取つたから原付で行く予定」

そう言えば、休み時間に原付の免許の勉強をしてたな。いつの間にか取つてたのか。この学校は原付の免許を取るのも許されてるし、原付での登校も許されているんだつたな。意外と緩いなこの高校。

そんな事を考えているとポケットに入っている携帯が震えた。ポケットから取り出して確認するとなでしこからメッセージが届いていた。

なでしこ『お兄ちゃん、来週の土日に野クルでキャンプに行く事になつた!』

やまと『よかつたな。二人に迷惑かけないようにしろよ』

なでしこ『迷惑なんてかけないよ。お兄ちゃんは心配性だな』

やまと『お前とずっと一緒に居るから言える言葉だ。姉ちゃん達には自分で言えよ』

そう送つてから俺は携帯をポケットにしまつた。志摩達の方を向くと、不思議そうな顔をして一人が俺を見てきていた。

「どうしたんだ?」

「誰からの連絡かなうつて思つて」

「なでしこから。野外活動サークル達も来週にキャンプに行くらしい」

「えっ、マジで。何処に行くんだ？」

「何も書いてなかつたから知らん。たぶん、まだ決めてないんだろう。まあ、安心しろよ志摩。なでしこが言うには野外活動サークルのメンバーはサークルを作つてからまだ一度もキャンプをしてないらしい。近場のキャンプ場に行く筈だから、お前が来週に行く長野のキャンプ場には居ないだろう」

「そうか。それもそうだな」

志摩はホッとした表情をした。また志摩のソロキャンに邪魔されてしまうと思ったから嫌そうな表情をしていたのだろうな。この間は俺となでしこはお邪魔してしまつたから、ソロキャンを楽しめなかつたからな。でも、鍋キャンプしてた時は楽しそうにしてたけどな。

「なでしこちゃん達も来週キャンプに行くんだ。各務原くんは来週の週末はどうするの？」

「日曜は朝から昼過ぎまでコンビニのアルバイト。斎藤は？」

「私は土日とも暇だよ。これが帰宅部でアルバイトしていらない人の特権だから」

そうなると俺と斎藤は土曜日が空いていると。なでしこや志摩達は楽しくキャンプか……なんかアイツ等だけ楽しんでいてモヤモヤするな。そうだ！」

「それなら斎藤、土曜日に日帰りでキャンプしようぜ」

「えつ、日帰り？ キャンプ？ キャンプならもう少し暖かくなつてからがいいかなー」

「別にキャンプじゃなくていいけど、昼くらいの暖かい時にちくわを連れて公園とかに行つて遊んだりしないか？」

「それいいかも。うん、行こう」

俺の突発的な提案に斎藤は意外にも乗り気だつた。
まさかのつてくれるとは思わなかつたな。寒いから出て行かな

いつて言つて全部断つてくると思つた。もしかしてちくわを話に出
したから乗り気になつたのか？

「おーい、そろそろ図書室閉めるぞ」

「わかつた。それじゃあ細かい事はまた明日決めよ」

「了解」

そう言つてから俺達は図書室を出た。

こうして俺は来週の土曜日に斎藤とちくわとでお出かけする事と
なつた。

なでしこ達、野外活動サークルがキャンプをすると決めた次の週の土曜日。

俺は一人リュックを背負つて電車に乗つて待ち合わせ場所である斎藤の家に向かっている。先週に斎藤とちくわとで約束してたピクニックの日だ。今日に行く予定の公園は斎藤が教えてくれた公園で、斎藤の家から近いようなので待ち合わせ場所は斎藤の家となつた。それと、朝に一度寝して寝坊してしまいそうだから斎藤の家に待ち合わせ場所にして欲しいと頼まれたからだ。斎藤の家は事前にマップアプリで家の場所を教えて貰つていて場所はだいたいは分かる。

ピクニックだから俺は自分の分と斎藤の分の弁当を作る事にした。この間に志摩にキャンプで作った鍋が美味しかつたと話をしたから俺の料理を食べたいと言わされたから作る事にした。まあ、俺が今日斎藤とちくわを誘つたからこれくらいは容易い事だ。……弁当を作つている時にキャンプで作るキャンプ飯の準備をしていたなでしこが目をキラキラさせて食べたそうな顔をして見てきたが無視して弁当を作つた。いつの間にかなでしこがキャンプに行つていた。

斎藤の家の近くの駅で降りて、斎藤の家に向かつて歩いている。今日の天気は晴れで、気温もいつもよりも暖かい。これなら斎藤とちくわも家から出られそうかな。……それよりも起きているのだろうか？取り敢えず、メッセージアプリで連絡してみるか。俺は携帯を取り出して斎藤にメッセージを送つた、着く頃にはメッセージを見てくれて準備を終わらせるだろう。

斎藤の家に無事に着いたんだが……

「まだ既読がつかないな」

メッセージアプリでさつき送つたメッセージを見ててくれてないらしい。もう一度斎藤にメッセージを送つたが既読がつかない。これは絶対に斎藤は寝てるな。

「取り敢えず、インターフォンを押してみるか」

俺は斎藤家のインターフォンを押してみた。ピンポンと音が斎藤の家の中で響いた。少ししてから扉が開いた、眼鏡をかけた斎藤っぽい感じの男性が出てきた。たぶん斎藤の父親だろう。自己紹介をしてから斎藤を呼んで貰おう。

「あの、初めまして。私は各務原やまとといいます。斎藤……恵那さんは友達で、今日は遊ぶ約束をしていましてお宅まで来ました。恵那さんを呼んで貰えませんか？」

「・・・」

俺は斎藤のお父さんに説明してみたが、斎藤のお父さんは表情をいつも変えずに何も話さず無言だつた。これは怒っているのだろうか？

そんな事を考えていると斎藤の父親が一步下がつてからこちらに手招きをしてきた。これは入れつてことなのだろうか？

「えっと、お邪魔してもいいのでしょうか？」

そう聞くと斎藤のお父さんはこくりと首を縦に振ってくれた。そしてスリッパを出してくれた。俺は『お邪魔します』と一言いつてから斎藤の家にお邪魔した。スリッパを履いてからリビングに向かった。

「あつ、ありがとうございます」

「・・・」

リビングに入ると暖房をつけていて床は床暖房をついていた。床暖房はちくわの為についているのだろうな。……斎藤はリビングに居ないな、それとちくわも。そんな事を考えながら突っ立つていると斎藤のお父さんにソファに座るように進められてソファに座った。ソファに座つてから斎藤のお父さんが温かいお茶を出してくられた。……無言でだけど。

俺は一口お茶を飲んでから一息ついてから斎藤の事を聞くことにした。

「あの、恵那さんは？」

「・・・」

そう聞くと、齊藤のお父さんは立ち上がりリビングを出て行き階段を登つて行く足音が聞こえてきた。たぶん、齊藤の部屋は2階なのかな。そんな事を考えながら両手で湯呑みを持つてお茶を飲んだ。

すると、上方から齊藤の驚いた大きな声が聞こえてきた。これは齊藤は寝坊してたな。齊藤の予想通りに寝坊したな。齊藤の家を待ち合わせ場所にして正解だつたな。

リビングに齊藤のお父さんとちくわが降りてきた。ちくわは俺の事に気がついて俺の方に近づいて来た。俺は近づいて來たちくわを抱っこした。

「久しぶりちくわ、元気だつたか？」

『ワフウ』

「そうか」

俺はちくわを膝の上に乗せて撫でた。ちくわは気持ちよさそうな顔をして鼻ちようちんを作つて眠りだした。こののんびりとした感じは齊藤に似たのだろうな。

「ごめん各務原くん、もう少しだけ待つて！」

「えっ、ああ」

すると齊藤が慌ててリビングにやつて來た。服は着替えていたが髪の毛が寝癖が出来ていた。こんなにも慌てた齊藤を見るのは初めてだな。まあ、まだ知り合つて1ヶ月も経つてないけど。……知り合つて1ヶ月くらいの奴が家まで遊びに來るのは普通なのだろうか？これまで友達が綾乃しか居なかつたからな。

『ワフウ？』

「うん……なんでもないよ」

ちくわは俺の方を向いて不思議そうな顔をして見えてきた。俺はそういう言つてからちくわをまた撫でた。ちょっと考えすぎかな。

俺は齊藤とちくわの少し遅めの朝ごはんを食べ終わるのを待つていた。朝ごはんは齊藤のお父さんが作つてくれて、齊藤は慌てて朝ごはんを食べようとしていたが、俺がそれを止めて斎藤はゆっくりと朝

「はんを食べた。床ではちくわも朝ごはんを食べていた。

「ほんとうにごめんね各務原くん。二度寝しちやつて」

「いいよ。今日はバイトもないから1日暇だから」

「ありがとう各務原くん」

「朝ごはんを食べ終わつたばかりだから少しゆつくりしてから行こうか」

俺はそう聞くと齊藤は肯定してくれた。食べてすぐに動くのはしないからな。そう言えばちくわと齊藤のお父さんが居ないけど、何処に行つたのだろうか？

「なでしこちゃんはもうキャンプ場についたのかな？」

「そう言えば、なでしこからさつきメッセージが届いていたな」携帯を確認するとなでしこからメッセージと写真が届いていた。写真はなでしこと野外活動サークルの2人のスリーショットの写真が送られていた。なでしこは元気そうだけど、他の2人は疲れた表情をしているな。

「なでしこちゃん達も楽しんでるね」

「そうだな、志摩からはまだ連絡はないからまだ原付に乗つてているのだろうな」

「たぶんそうだね。私達もそろそろ向かおうか」

そして俺と齊藤は立ち上がつた。するとさつきまで居なかつたちくわがリビングに戻つて來た。初めて会つた時に着ていた緑のダウンコートを着ていて、頭にウサ耳を付けていた。何故犬にウサ耳を付けているんだ。それと齊藤のお父さんが無表情で俺の方を見ていた。何故かドヤ顔をしているように見えた。いや、どんな反応したらいいのか分からない。

「よーしよし、ちくわも行こつか」

『わふう』

「お茶ありがとうございました。お邪魔しました」

俺は齊藤のお父さんに一言お礼を言つてからリビングを出た。齊藤のお父さんは何も言つてくれなかつたが『また来たね』つて言つて

いるように思えた。

そして俺と斎藤とちくわは家を出て公園に向かって歩き出した。